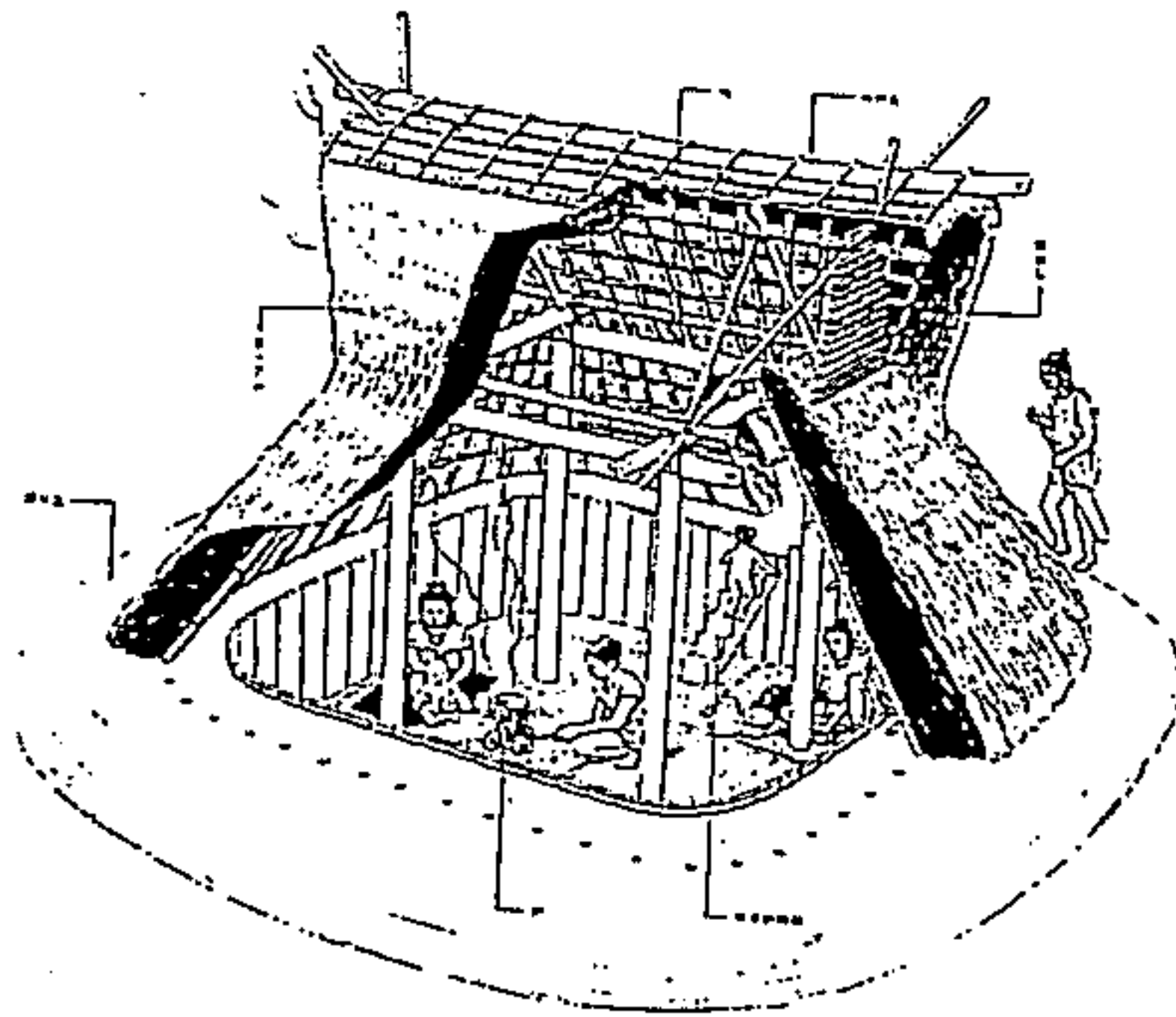


西条町西条東

諏訪神社周辺遺跡見学会資料



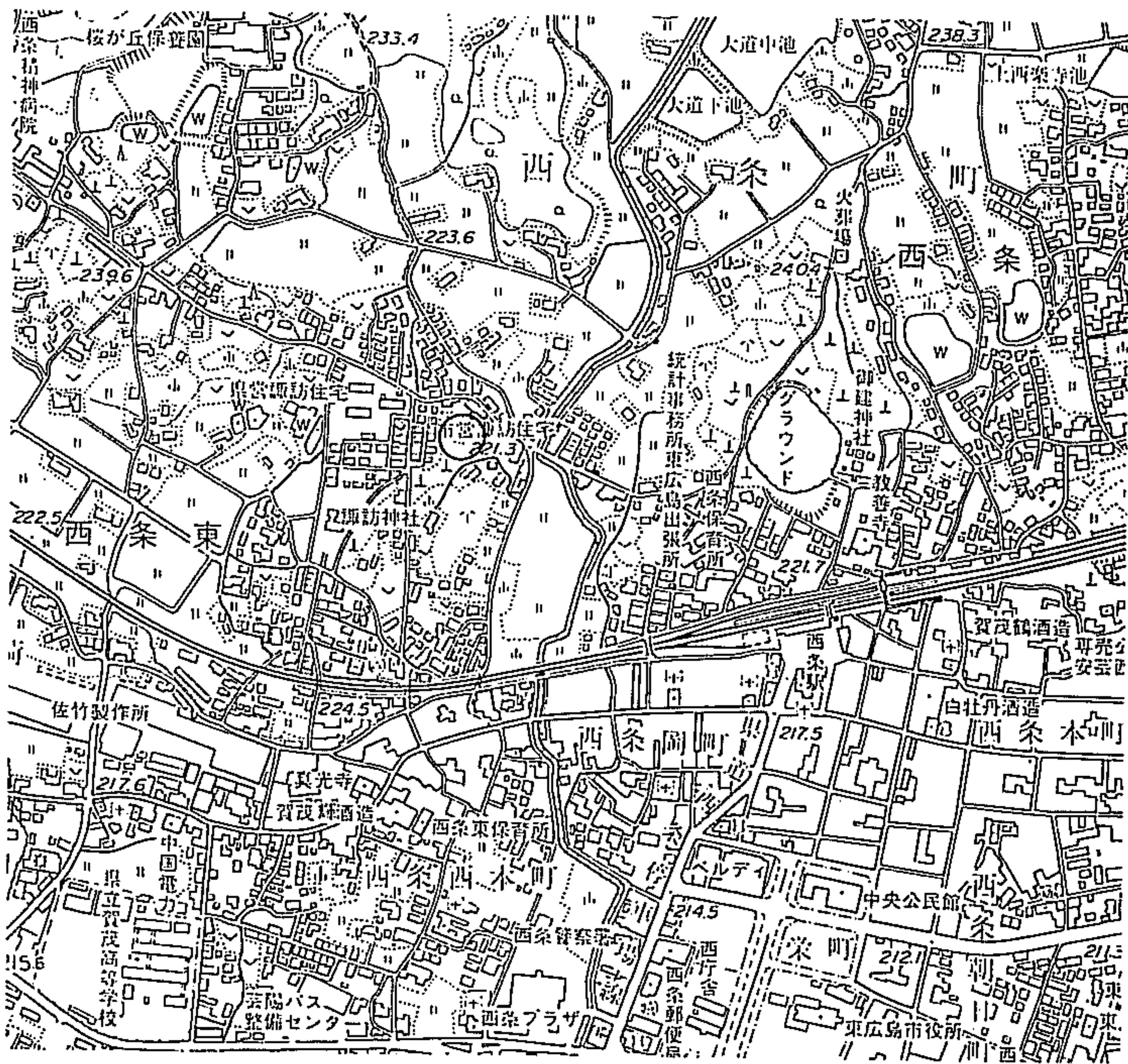
平成6年11月23日

財団法人東広島市教育文化振興事業団
東 広 島 市 教 育 委 員 会

1 はじめに

財団法人東広島市教育文化振興事業団 文化財センターでは、住宅建築に伴う諏訪神社周辺遺跡の発掘調査を平成6年（1994）9月1日から実施しています。

諏訪神社周辺遺跡は、東広島市西条町大字西条東の諏訪神社を中心とした丘陵一帯（約120,000m²）に広がる遺跡で、弥生時代から中世までの遺物が出土します。今回の発掘調査は、遺跡の北東隅付近を対象としたもので、調査面積は1,168m²です。



諏訪神社周辺遺跡位置図（○は発掘調査地点）

2 調査の成果

発掘調査の結果、弥生時代の竪穴住居跡9棟、住居状遺構3基、貯蔵穴4基、弥生時代と中世の溝状遺構6条などが明らかになりました。

A 竪穴住居跡

竪穴住居跡は、平面の形態が円形のものが大半ですが、多角形のものや方形のものも見られます。

直径が大きいS B 1は、2回以上の建替えが行われていました。東側の一部が畑の溝で壊されていますが、中に多くの穴があります。周囲には浅い溝が同心円状に3条廻っていますが、それぞれの溝が住居の壁になります。内側の溝が最初に建てられた住居跡です。中央に浅い楕円形をした炉跡があり、6本の柱で屋根を支えていました。次にこの住居を埋めて建てられたのが一回り大きな住居跡です。古い住居と同じように6本の柱で屋根が支えられていました。そして最後にそれまでの住居を埋めて建てられたのが外側の溝が壁となる住居跡です。長径約8m、短径約7mと楕円形気味ですが、8本の柱で屋根が支えられていたと考えられます。

なお、最初に建てられた住居は六角形を意図していたようです。

S B 2も直径が大きな円形の住居跡です。中央に畑の溝が走り、東側半分が削平されているため、壁になる浅い溝が完全に残っていません。中央に炉跡をもち、11本の柱で屋根が支えられていました。

S B 3～6・9は、5棟が重複して建てられていましたが、それぞれの時期は異なります。中央に見られる最も大きなS B 4が最初に建てられたようです。S B 3～5・9は円形ですが、S B 6は隅丸の方形で、4本の柱によって屋根が支えられていました。

S B 7・8は、斜面に建てられた住居跡です。斜面を「コ」字状に削り、その土を前面に押出して平らな面を造成したもので、その

上に屋根を設けていました。屋根を支えた柱は不明ですが、S B 7には床の中央に焼土や炭化物が見られます。

この他、住居状遺構が3基あります。本来の性格については明らかにできませんが、上に屋根を葺いて住居もしくは倉庫・作業場として使われていた可能性も考えられます。

B 貯蔵穴

貯蔵穴は4基あります。上面が後世に掘削されているため浅くなっていますが、掘られた当初は1.5～2 m程度の深さがあったと考えられます。中に穀物を入れた壺を置いていたのでしょう。周囲から土が流れ込んで埋まりはじめると、ゴミ捨て穴として利用されていました。

C 出土した遺物

これらの竪穴住居跡や貯蔵穴からは、多量の弥生土器や土製品・石器が出土しました。弥生土器は現在、洗浄・接合作業中のために全てを見ることはできません。今回は一部を展示していますのでご覧ください。

弥生土器は、壺・鍋（甕）・鉢・高杯があります。鍋は多くのものにススが付着していることから、煮炊きに用いられていました。鉢や高杯はそれに料理を盛っていたのでしょう。

土製品は、S B 1から勾玉、S B 4から紡錘車が出土しました。このうち土製の勾玉は広島県内で8遺跡25点が出土しています。ところが、いずれも弥生時代終末頃に使われていたもので、諏訪神社周辺遺跡のように弥生時代中期までさかのぼりません。一般的に弥生時代の勾玉は北部九州地域で生み出された政治的・呪術的な玉といわれています。弥生時代中期後半から後期にかけて中国地方に伝播し、稲作農耕にかかわるマツリに使用されていました。

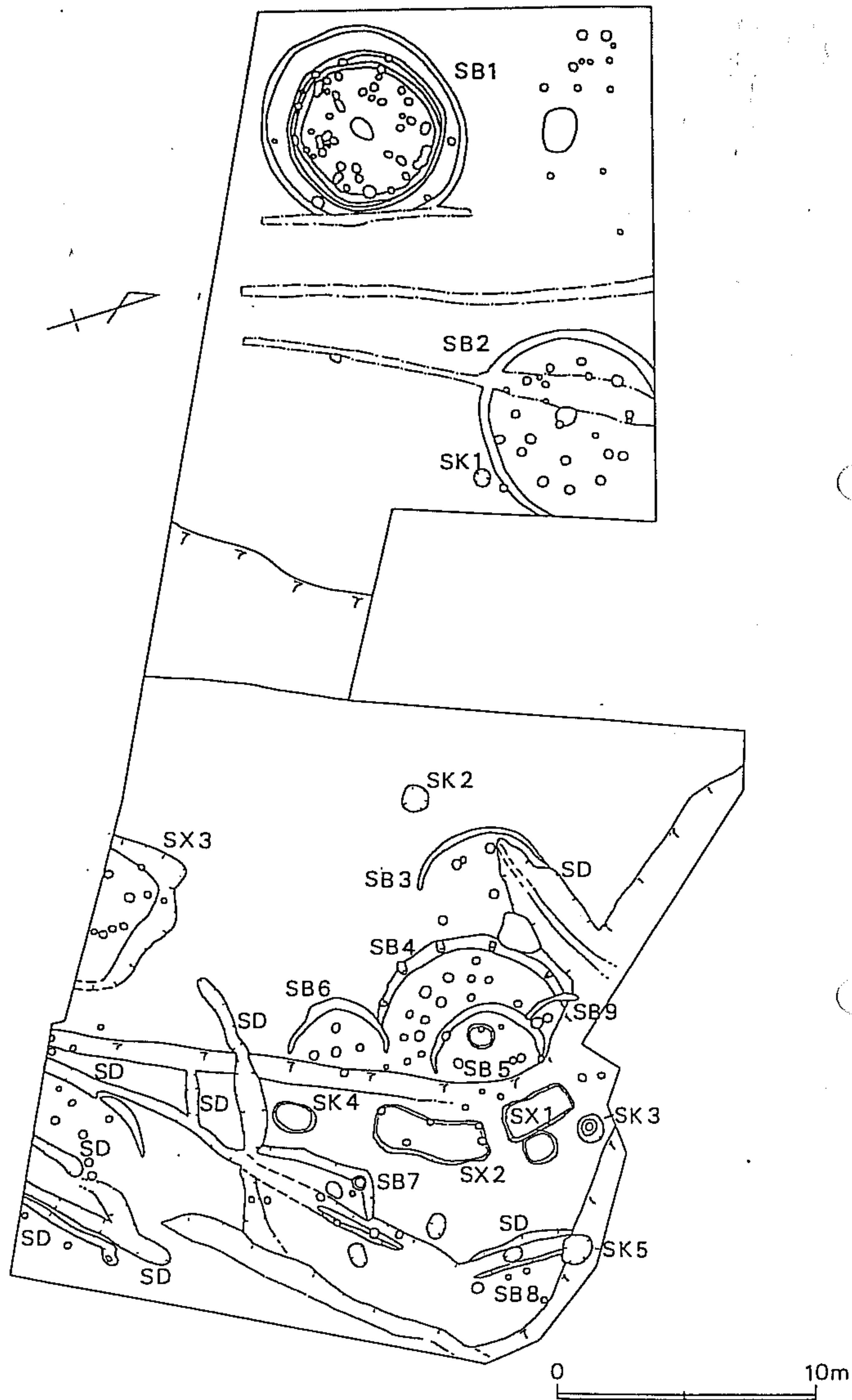
石器は、ヤジリとそれを作る素材（剥片）などが出土しました。

3 ま と め

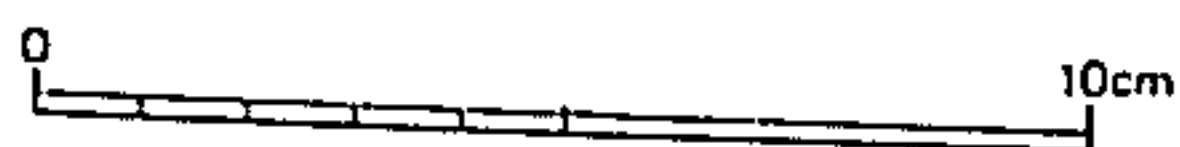
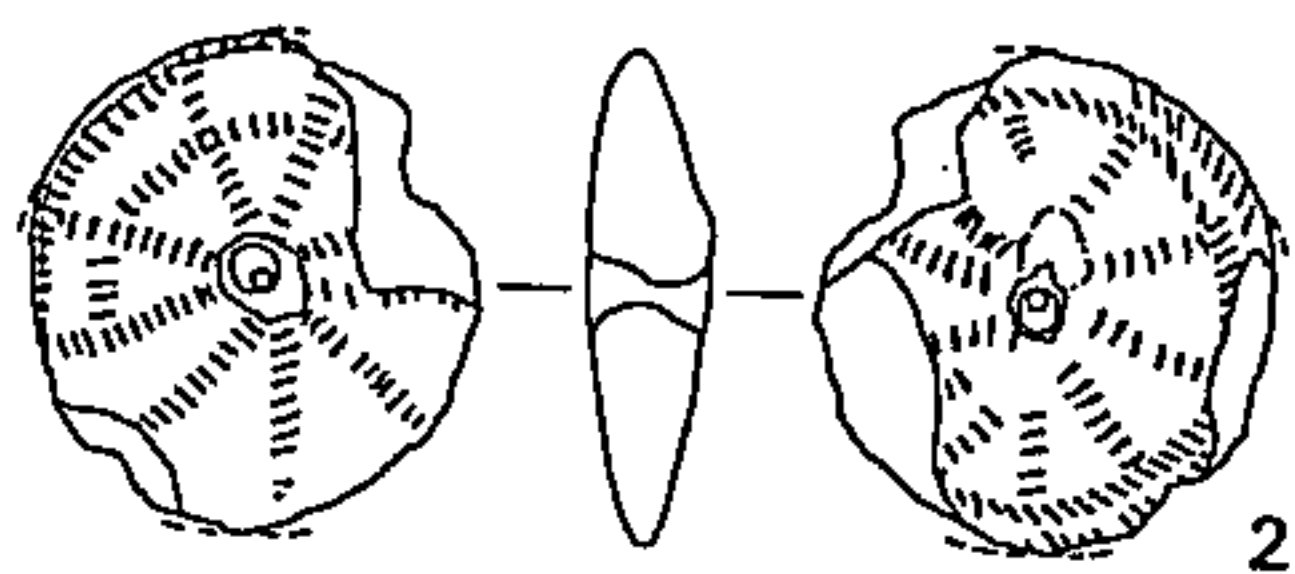
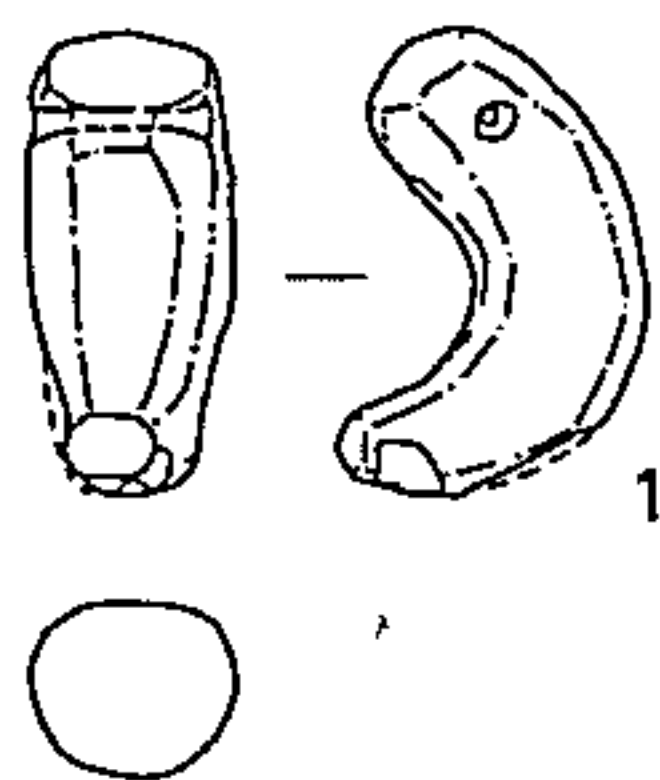
諏訪神社周辺遺跡の今回の調査では、このように竪穴住居跡や貯蔵穴など2,000年前の弥生時代のムラの一部が明らかになりました。

竪穴住居跡は9棟検出しましたが、同時に建っていたのはS B 1・S B 2・S B 4の3棟です。出土した弥生土器からすると、弥生時代中期の終わり頃で、S B 3・S B 5などは弥生時代後期と考えられます。市内の高屋町宮領1号遺跡でも弥生時代中期のムラが発見されましたが、それは竪穴住居3棟からなる小規模なものでした。諏訪神社周辺遺跡の場合、調査区域の外側にさらに数棟の竪穴住居跡が存在する可能性が考えられ、市内でも規模の大きなムラと推定できます。

こうしたムラで弥生時代の人々は稲作農耕や狩り、さらに木の実などを採集して生活していたのでしょう。邪馬台国の女王卑弥呼が生まれる200年前の遺跡です。

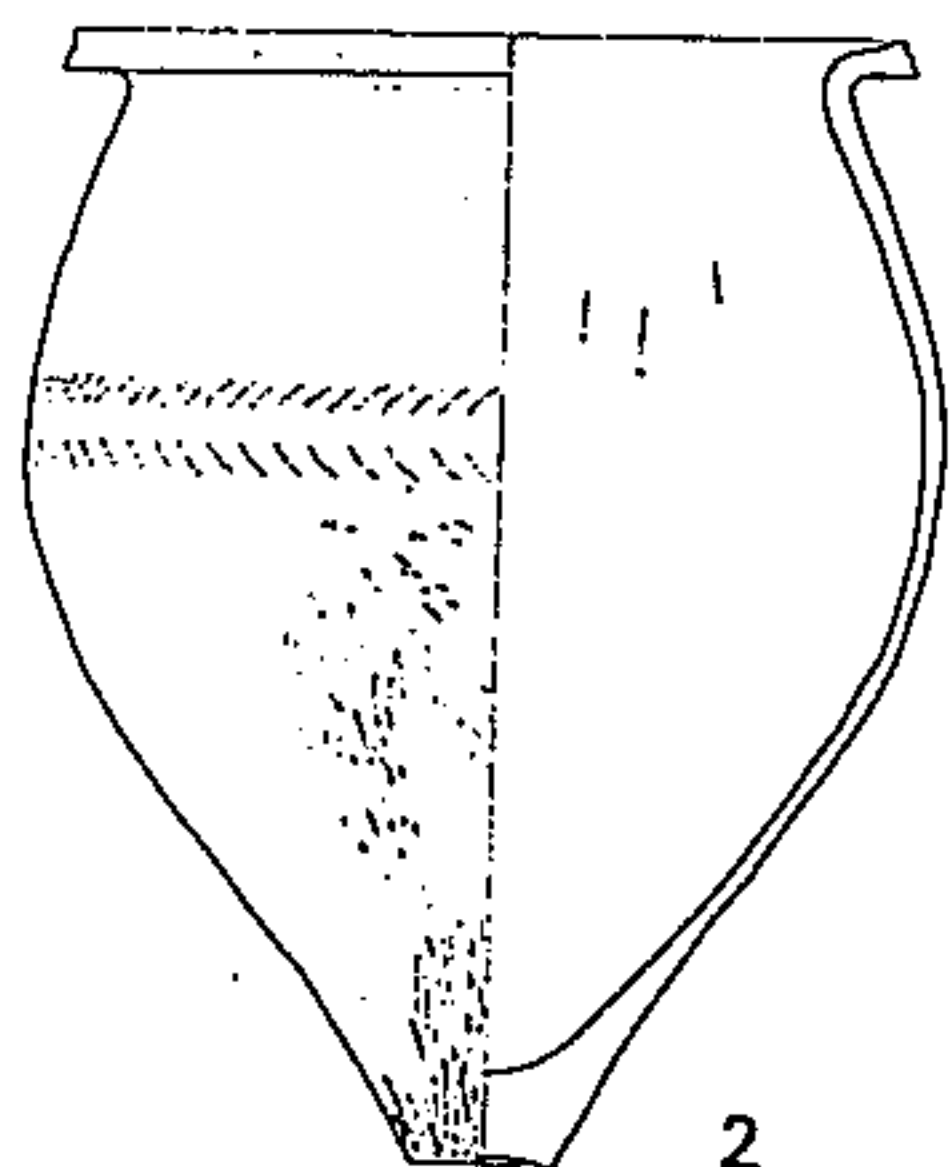
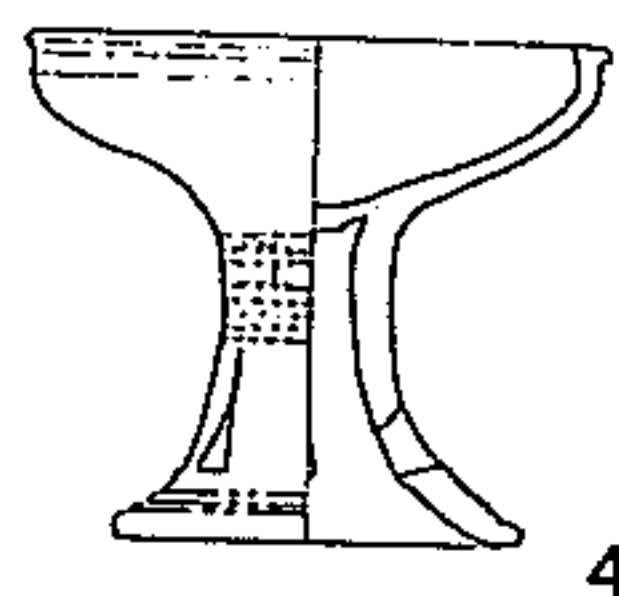
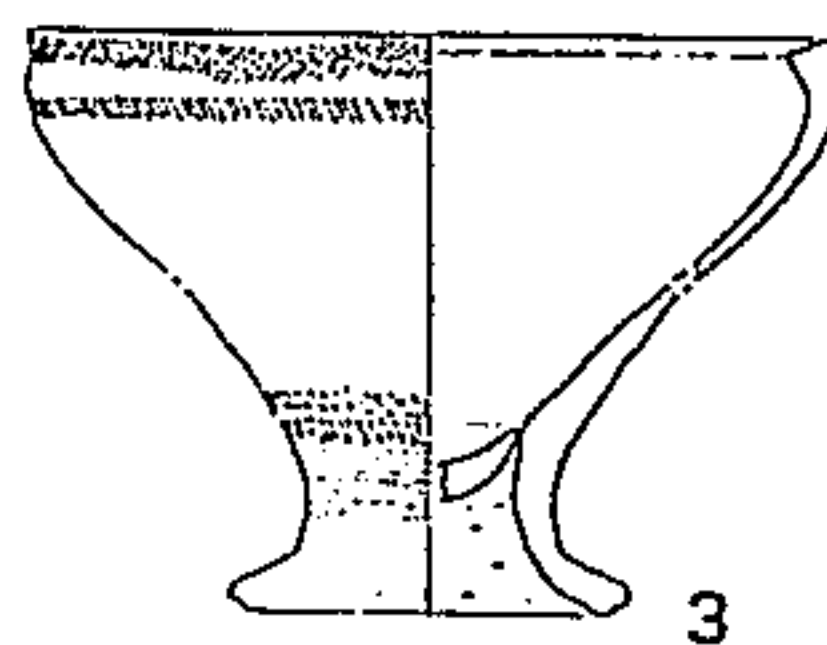
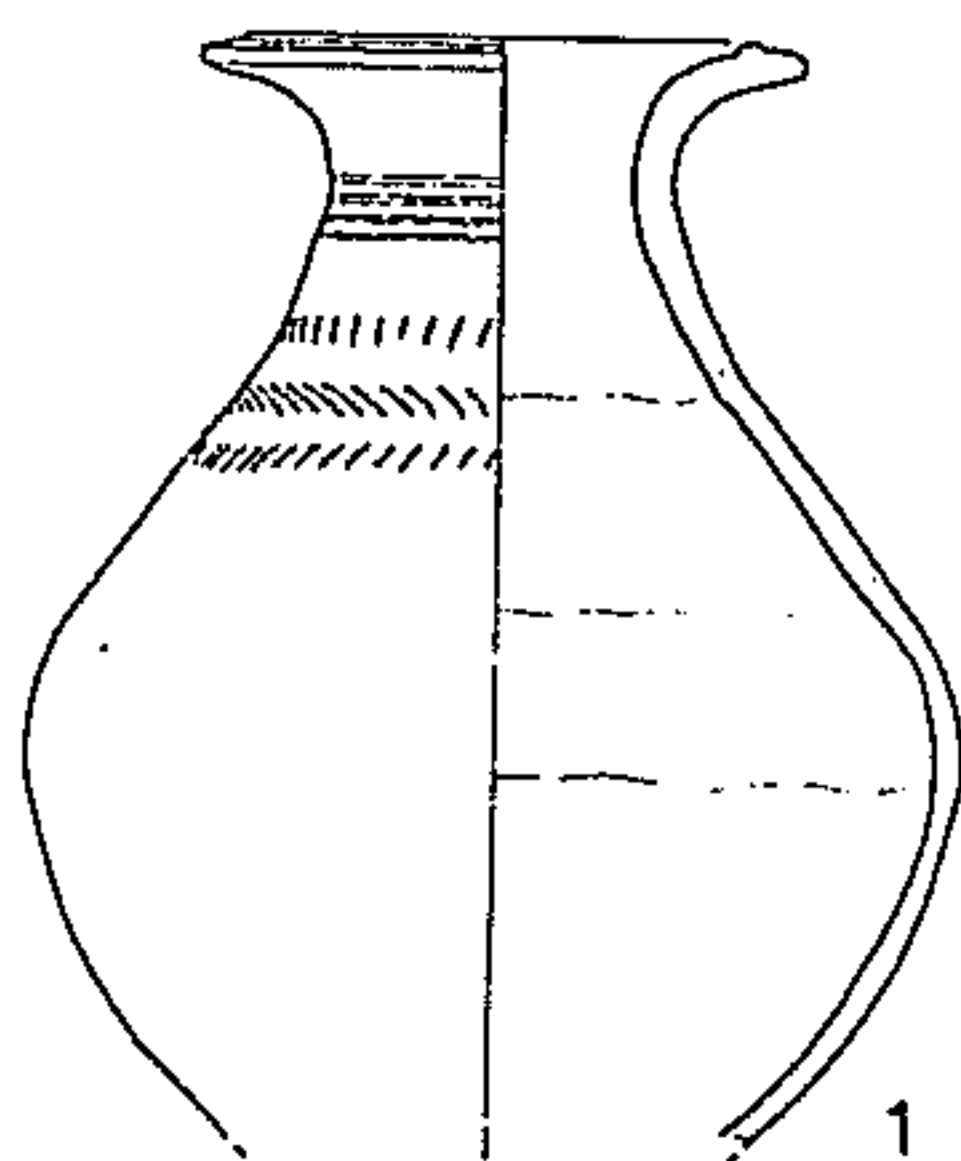


諏訪神社周辺遺跡遺構配置図



諏訪神社周辺遺跡出土遺物

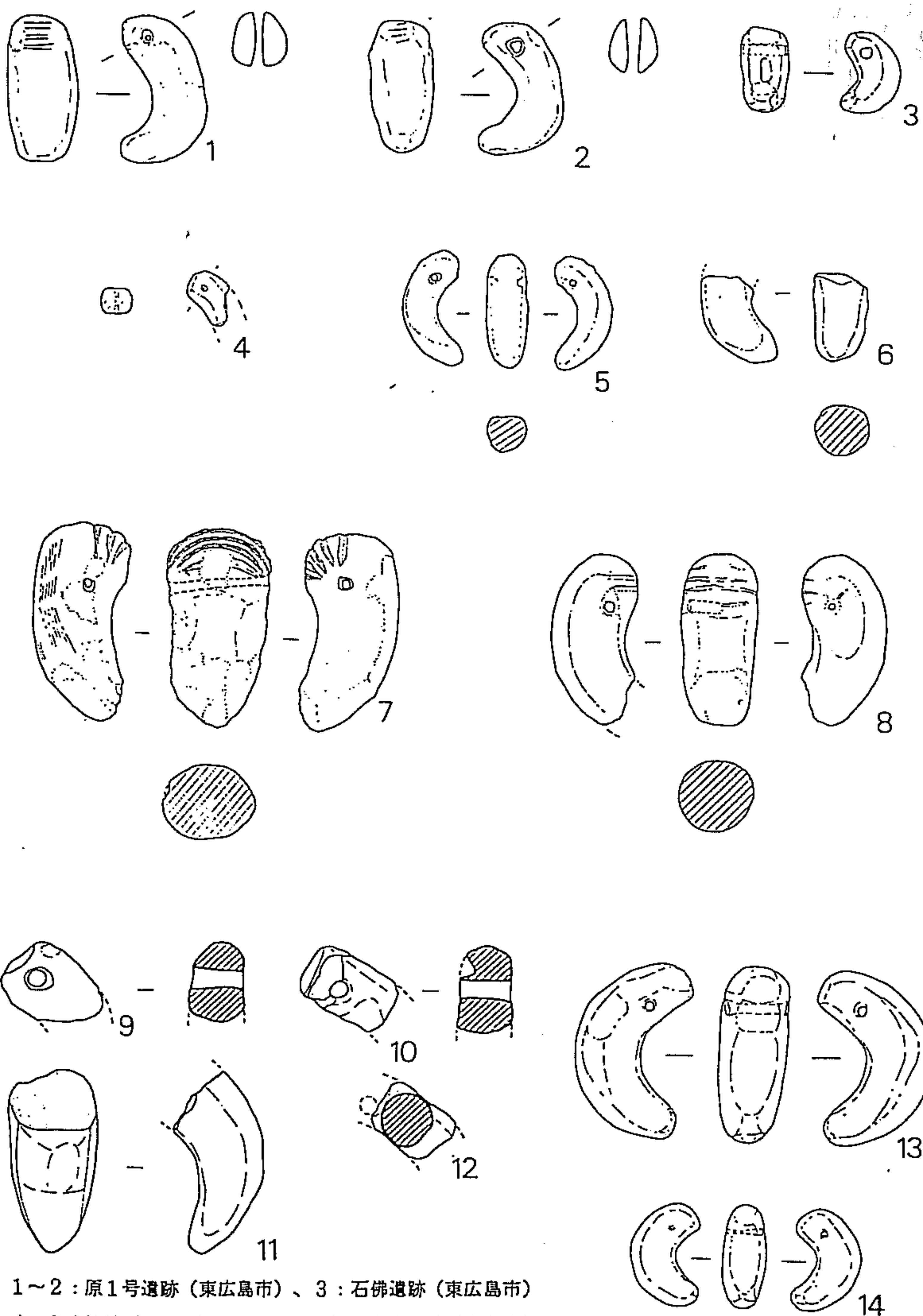
1 : 土製勾玉、2 : 土製紡錘車 3 : 打製石鏃



浄福寺2号遺跡（東広島市高屋町）出土遺物

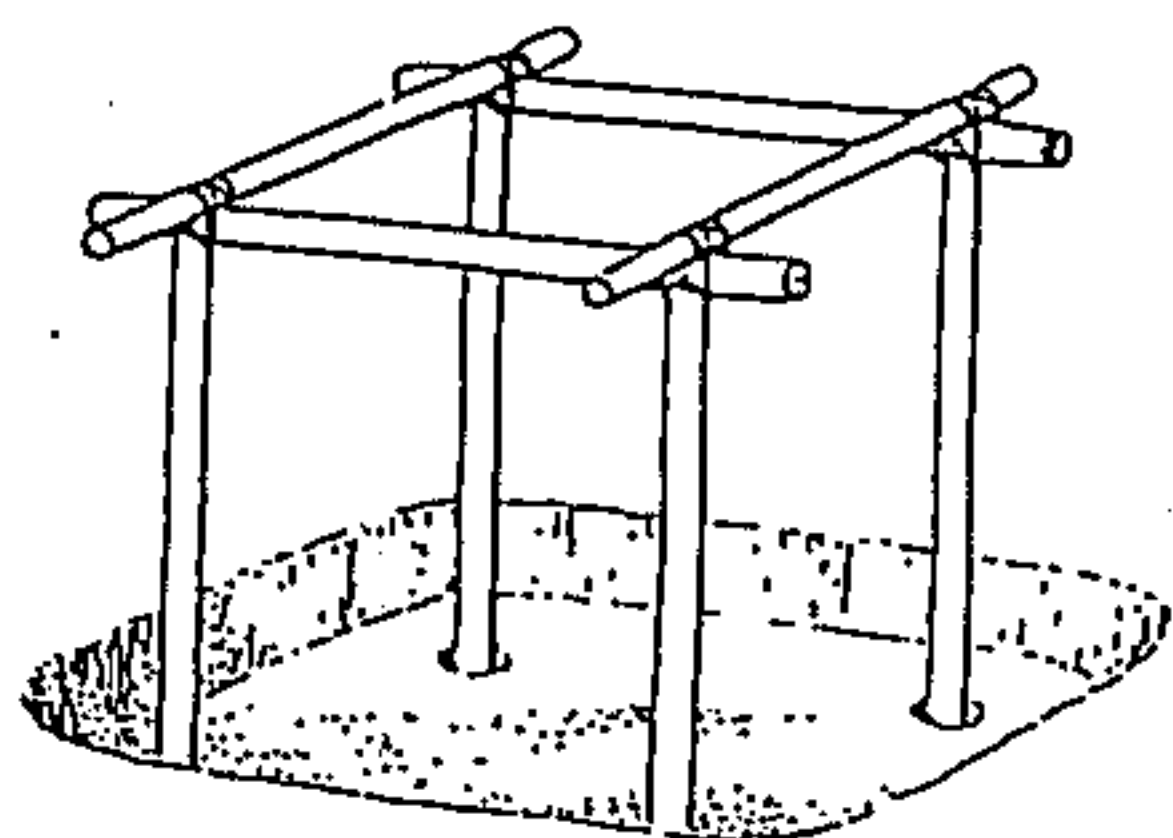
（諏訪神社周辺遺跡と同じ時期の土器）

1 : 壺、2 : 鍋（甕）、3 : 鉢、4 : 高杯



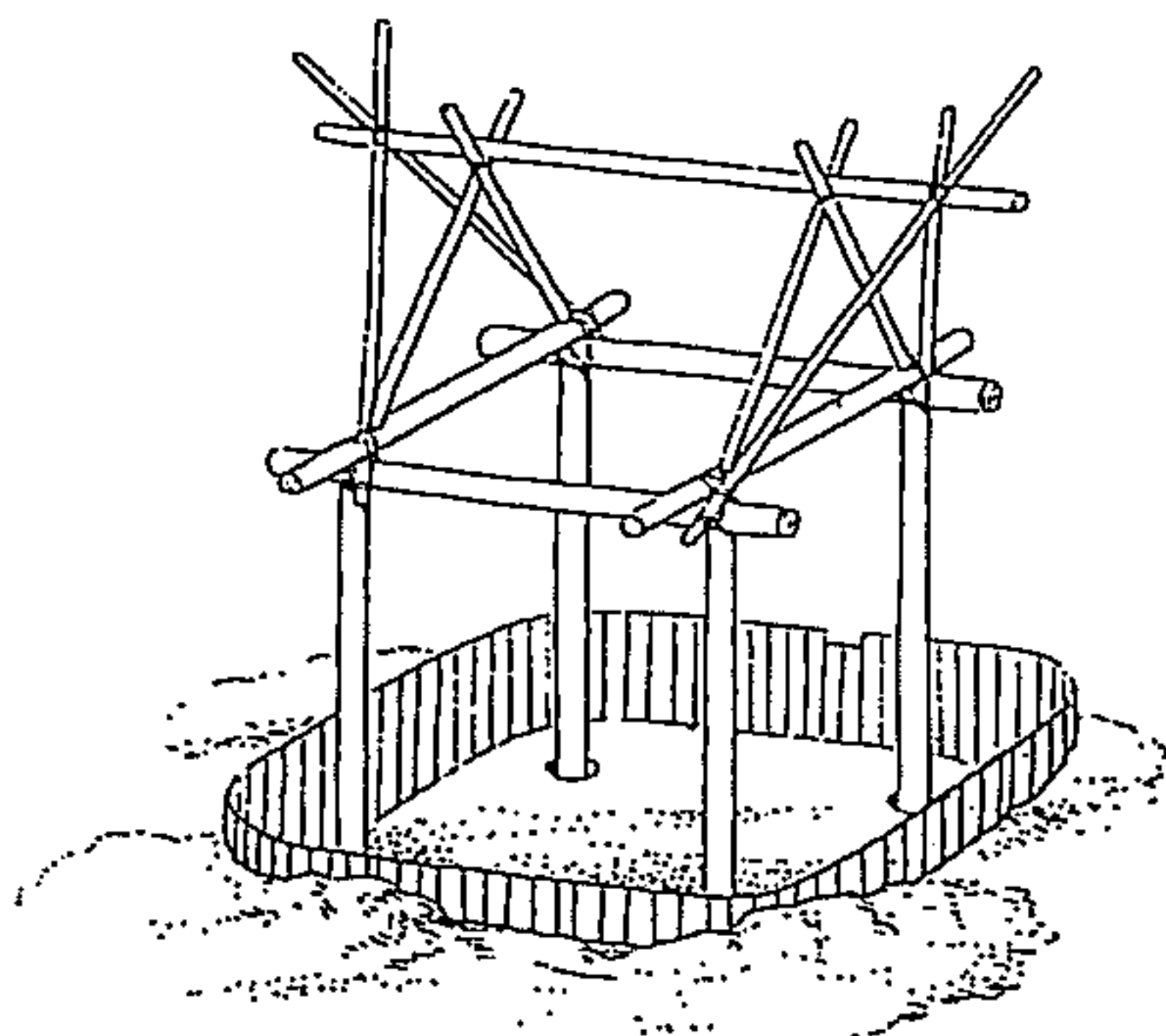
1～2：原1号遺跡（東広島市）、3：石佛遺跡（東広島市）
 4：名広遺跡（高宮町）、5～8：毘沙門台東遺跡（広島市）
 9～12：大谷遺跡（広島市）、13・14：大明地遺跡（広島市）

広島県内出土の土製勾玉



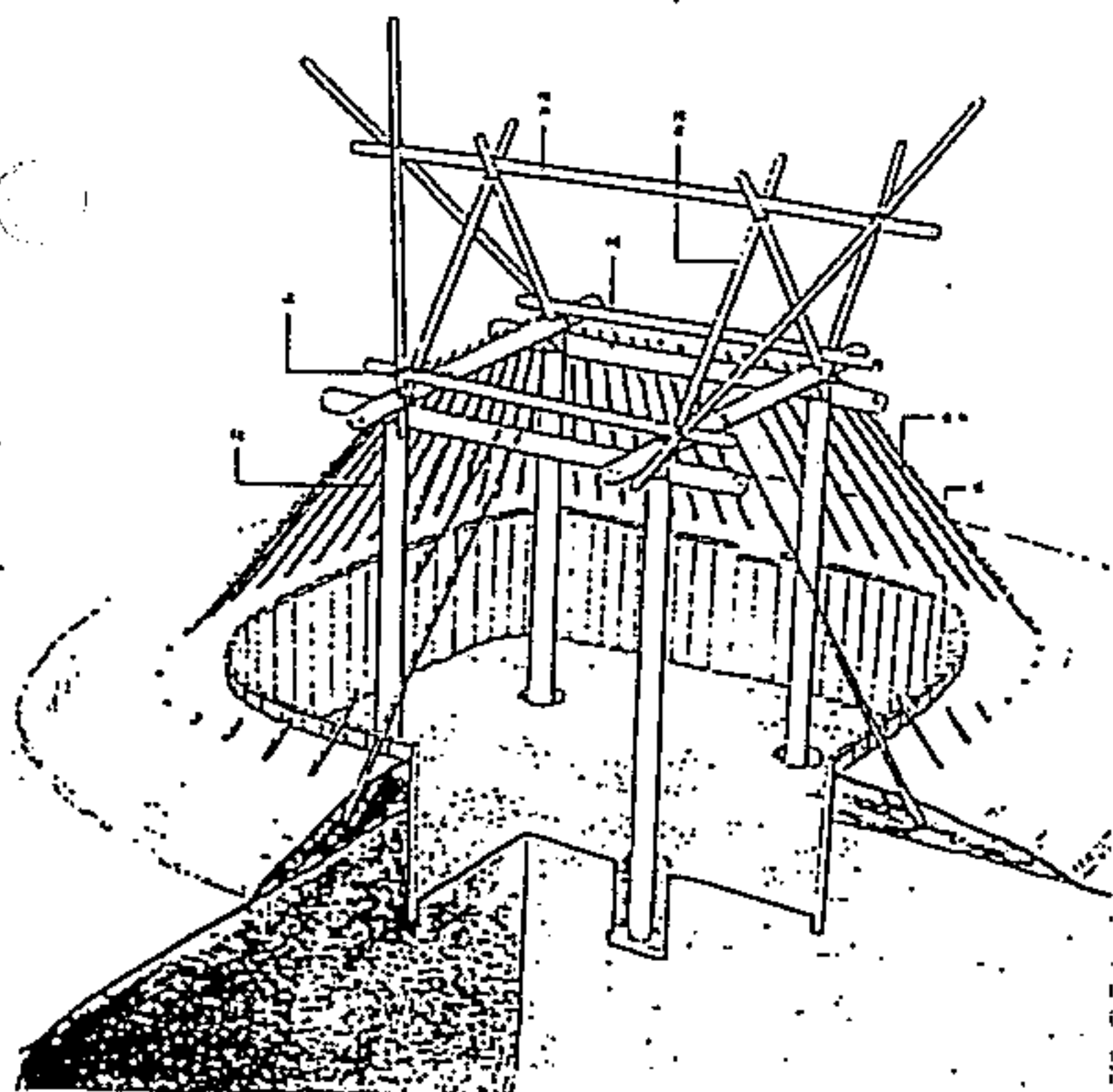
柱を立てる

地面を円形または方形に50cm前後掘り下げ、床をつくることから始める。床に柱を入れる穴を掘り、柱を立てる。



小屋組をかける

梁組の上に棟木を載せて小屋組の枠をつくる。さらに、掘り下げられた堅穴の側面には壁板を立てられ、壁土が崩れないように補強されて行く。



骨組みの完成

堅穴の周囲に盛土をし、地固めを行う。盛土は風を遮り、雨水の侵入を防ぐとともに、保温性と防湿性に優れ、ここに差し込まれた屋根の骨組みとなる垂木を支える。

垂木はほぼ等間隔に差し込まれ、カヤなどを葺くための横木（桟）が結び付けられた。これで住居の骨組みがほぼ完成する。

堅穴住居ができるまで